

四極山打越見者笠縫之島傍隱棚無小舟

〔古今和歌集雜十七〕題しらず

よみびとしらず

なにはがた鹽みちくらしあま衣たみのゝ島にたづ鳴わたる

〔倭訓釋前編十〕さくらさくら島薩摩にあり鹿兒島に向へり近年山上に火もえ出たり

〔遊囊臘記十三〕櫻島ハ周回六七里其山ノ形富士ニ似タリ古老ノ説ニ此山應仁二年文明三年同八年安永八年何レモ火起テ焚島ノ患アリケルトイフ島隱漁樵集歷七里原西南有一島曰向文明丙申秋火起焚島煙雲簇也塵灰散之青茅之地忽變白沙堆滄桑之嘆不克蔑于懷ト記セシハ其一ナリ

〔慶藩名勝考二〕櫻島 本朝文粹等亦云向島武備志同是麿島に對備するの名なり櫻島といふはむかし櫻花一葉海上に浮てよりなれる島ゆゑ名つけしと云舊説あり蓋木花開耶姫の名によりしなるべし方角集に薩摩の内に收めしは誤なり

府東海上一里周回七里

山上八分より上は三條の外路なし涉るを一里といひ降るを十八丁と云皆九折の嶮岨なり顛に湖あり嶺に神祠あり彦火々出見尊を祀る又月夜見尊火闌降命をも配祀すと云故に兎を愛して島民其名を諱て敬謹するものは月夜見尊を奉祀するが故といふ

〔西遊記五〕山汐

安永年間薩摩の櫻島山大に焼て後山上より大水溢れ出て田地民家大に損せり所の人これを山汐といふ抑此櫻島といふは海中にありて麓のめぐり七里山の色黒く一峯に聳て比叡山二ツばかりも重ねたるごとに高しふものめぐりに人家田地ありて富饒の所なり其峯の歴たりし事は希代の珍事にてくわしき事は別巻にしるせり其焼漸鎮りて人々も再び活たる心